

巻 頭 言

本 城 秀 次*

この度、中等教育センター紀要第4号を刊行する運びとなった。編集委員の一人として喜びに耐えない。

私は児童精神医学を専門としているため、中学、高校年代の子どもを診察する機会が多い。もちろん、私は診察室での関わりという非常に小さな窓を通してしか子どもと関わっていないので、学校や家庭での子どもの姿をそれ程知っているわけではない。しかし、子どものこころの問題に治療的に関わるためには子どもの生活状況を全体として知らなければならない。そして、子どもの生活の中で非常に大きな部分を占めているのが学校である。そのような意味で学校の有り様はわれわれ児童精神科医と大きな関わりを有している。

素人目のわれわれからすると、日本の初等、中等教育の方向性は必ずしも明確でないように見える。例えば、ゆとり教育と学力低下の問題等が新聞紙上でしばしば取り上げられている。このような問題はわが国の将来を担う若者をどのように育てるかという、ある意味で国の根幹に関わる問題である。しかし残念なことに、そのような教育問題についてここで議論できるほどの能力は私にはない。その代わりに、ここでは私が日常臨床の中で感じていることを取り上げたい。

日常の臨床活動の中で子どもを通して学校を見てみると、子どもとともに気になるのは教師の方である。教師の問題としてよく取り上げられるのは不適格教師の問題である。そのような教師が存在するのも事実であろうが、むしろ多くの教師は仕事の重圧により疲労困憊しているのではないかと私には思われる。最近教師のうつ病をよく見かけるが、多くの教師が疲れ果て、余裕をなくしているのではないだろうか。そのような教師が、子どもを生き生きとした豊かな情緒性と優秀な学力を備えた子どもに育てることが出来るのであろうか。私には、教師自身が自分の生き方に満足し、生き生きと生活しているのでなければ、子どもをそのように教育することは困難であると思われる。

それゆえ、教師のメンタルヘルス研究は中等教育研究のひとつの大きなテーマになるのではないかと私には思われる。教師のメンタルヘルスが改善されれば、中等教育はうまく行くのではないだろうかとさえ思う。すこし、我田引水というお叱りを受けるかも知れない。

ともあれ、われわれ児童精神医学を専門とするものは、社会の大きな流れの中で子どものこころの問題に向き合っているのである。しかし、何か子どもの事件が起こったときだけ児童精神医学が目されるのはわれわれの本意ではない。むしろ地道な臨床活動の中で社会と関わっているのである。最近、はっきりとした幻覚、妄想を有してはならず、一見したところ神経症、あるいは境界例レベルの問題ではないかと思えながら、その実、統合失調症を疑わせる子どもに出会うことが多くなったという印象を持っている。このような印象が単なる個人的印象に過ぎないのか、あるいは何

* 名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター教授

らかの心理社会的背景を持つ病像の変化なのかは分からないが、児童精神科医は子どものこころの問題に様々な形で家庭、学校、社会が影を落としていることを実感している。

それゆえ、中等教育研究は児童精神医学と密接な関連を有しているのであり、中等教育研究の推進が子どものメンタルヘルスの改善に貢献することを期待したい。